

第四号 五月十一日發行

東大學生 獄中書簡集

「獄」では、「人間」（即囚人）は
決して「死なせてはならない」のです。
何とここは、「人間の生」を
重んじる所だと思いませんか？
まさしく

このブルジョア社会と同程度にノ

目

次

一、四月二十五日東拘より	君	(法学部)	一
二、四月二十八日	I		
三、四月九日	坂		
四、四月十六日	西		
	雄		
	一	(広島大)	三
水上	井		
26	澄		
号		(三号のつづき)	四
(完黙)			
(三号のつづき)			
八			

四月二十五日東拘より

I 君 (法学部)

度々、面会、差入れありがとうございます。学部のビルや討論資料などを読むのは、何といっても一番、心にしみいるものです。僕達の人间的生にとて、本質的には内も外もないのですが、それでも外では、再び「生き急ぐ」生が大手を振って、かゝ歩しているでしょうし、外から見れば、「社会的死」を強要されて時間が止っているようにみえるかも知れぬ、内に於ても、やはり、僕達は必死に生きており、時間は、自分の情況と奥底まで浸み透って、より根源的な内的時間を形づくろうとしているのです。だから、君への手紙を通して、語りうるもの、語らなければならぬものをことばにしたいと思います。

獄中書簡集創刊号、読んでみました。ことばが、何と、生きたものを共有しているのだろうと感じました。ことばに对象化しえぬ無限の領域をはらみつつ、その内奥で、人間が！へ「自己意識をもった物」がではない生きている姿を身近に感じることができる。それは、もはや、「Aが生きている」ということは「Bが、Cが……生きている」ということと置き換えることができる、この社会に於る抽象的存在「AがBが……」「自我」を主張しながら、それは単なるアトム的個人の決して類的に結合しえない存在でしかない一ではない、互の生そのものに、かけがえのないものを、人間の共通

の運命をみてとることのできる生身の、具体的な存在・生としてなのだと思います。

僕達（何故、僕達と書くかと言えば、「全共斗一派」）調の十把一からげ即ち、民育の人達のように、自分一人一人を摩滅した上で成立する疎外された団結、弱いから徒党を組むといふのではなく、自分達一人一人の生・斗いの中に、自分達の人间的自立の為の共通の運命を見るから—そういうものとして、かけがえのない他者との関係を意識するから）の斗いの前には、そして現在も、随分、色んな、「かけがえのない個人の生・利害・活動」なるものが登場し、斗いに敵対し、制約づけたものでした。曰ク『君達は僕達の一生をダイナミックにする氣か』『他人の運命』を支配する権利があるのか』『民主主義を守ろう』云々。それらは、皆、「この社会に於て、自由な活動により、自分の運命を支配する」「かけがえのない個人」を脅かすことは許されないと名目に沿つたものでした。その言葉の裏から、醜い本音が顕わになる。

曰ク『自分達の運命・生・利害を脅かす全共斗』は彈圧されても当然だ』即ち『自分の生』（曰共なら、ここ所を、「自分たちの奉ずる路線」とおきかえる）—自己の奉ずる神の為には、他人の生はいけにえにされてしまう。市民社会の「人间の生」が、競争と分断、敵対と隸属関係の中で、みじめつたらしい、おのがシャイロツクとしての本質を、「かけがえのない個人と、その生」の名で隠し、合理化する姿を。

僕達の斗いは、個人の個人的反逆の算術的総和ではない。人

間の豊かさとは、その織りなす関係（共同体）の豊かさのことだ。だから、これまでの、みじめな、決して人間的には関係しあわない旧い共同体から、ただ、「反逆して出ていく」とともできない。まして△斗い▽の中で逆に、関係に一面的に対立し、摩滅し、自分の観念の中で「人間解放と自己救済」の神を信じて、現実には、疎外された人間と人間の関係しかつくれないので「断固として斗って」いることでもない（獄中十数年の人達の△斗い▽とは何か！）。

だから、僕達は、僕達の△斗い▽が、これまで、そして現在、未来、旧い共同体、人間存在のどれほど根源に手を触れてきたのか。そこから、新しい、かけがえのない人間的きづなと、生きた関係を目にする形でつくりあげようとしているかを問おうとおもう。それなしには、△斗っている▽僕達一人一人にとて必ずやぶつからざるをえない△家族▽等をはじめとする共同性（関係）にこの現実を通して、新しい豊かな関係へ改編せしめていくことができる、ただ△断絶▽△拒否▽をのみ、見るだろう。

日々、「労働監獄」の中で、摩耗し、スクランブ化し、合理化の一途階毎に、より多量に死んでいく労働者、「教育監獄」の中で、「生きて」といふと称しながら、日々、人間に死んでいく学生。全く、人間のかけがえのない生=死など、ムシケラごとく扱われ、沈黙の中にはうむりさらしていくくせに、そのことは、「秩序の番兵」として、やはり、置きかえ可能な抽象的存在でしかない一人の警官の△死▽が、まるで「一人の死に

よって、この市民社会（共同体）が変化する」かの如く、「手厚くいとおしまれる」權力による壮大な逆接の儀式によって一層本質をバクロする。

話が変るようになりますが、「獄」では、「人間」（=囚人）は決して「死なせてならない」のです。「死」を与えることのできるのは「國家」だけ。だから「人間」が△死▽への自己意識をそそるようなものは、管理上、「〇」なわけです。刃物は勿論、「これを使えば死ねそうだ」と考えられる「物」は皆、禁止。（だからこそ逆に紙と筆は、人間の、人間的生への自己意識をそそる、即ち、人間と人間の関係=コミュニケーションを求める「最も恐ろしい凶器」だから、「〇」な訳です。）皆さん、何とこか、「人間の生」を重んじる所だと想いませんか、まさしくこのブルジョア社会と同程度に！だから、はしくも、僕達は肥り、生きている次第です。

資本論の中で。マルクスは、「法律的表象上、全く△平等▽な契約関係をとりむすぶ△自由▽な存在=賃労働者」がその、自由な自己活動（右翼・民青諸君が求める！）の為。消費する「栄養」は、「労働者の提供する剩余労働よりも少ない強制労働をする囚人」より圧倒的に少ないと言っていますが、市民社会における「人間」の本質は、当然、変っていませんね（19世紀ヨーロッパ）

ああ、△時間▽の制限がくる。色々なことを書きたいが、その余裕がありません。最後にJ学部の学友、I君、K君、M君、N君、W君、T君……（自分のイニシャルがあれば、自分だと

思つて欲しい）、内村剛介著、『生き急ぐ』（三省堂新書）二〇〇）をお推めします。「未来に△罪▽を先取りする特異な能力を備えた」スター・リン・ロシア体制の獄中で十一年間、ただ、「存在していることが、罪」の為、送った彼の、△ことば▽は、「生き急ぐ」人々に、人間のインディヴィデアルな精神がもつ真実を照らしてくれる……。

弱い人間が、秀れて△強く▽「すぐっと立つ」ことの意味を

四月二十八日東拘より

坂西 雄一（広島大）

統一教対の皆さんへ始めて便りを出します。

今日二十八日、東京は全国の労働者、学生、市民の巨大なウネリの中に巻きこまれることと思います。連日の報道によると、全く狂氣じみた規制と弾圧体制が敷かれています。双方ともこの日のために、充分準備を進めてきたわけで、激烈な力と力の対決が演じられることでしょう。逮捕された当初は次の闘いを

四・二八に決め、出たらやったるぜと思ひながら、過ごしていましたが、日が経つにつれて妙な具合になつて雲行きがあやしくなってきたなと感じ始めました。案の定、残念なことです、が、今日という日をここで迎えることとなりました。長い闘いの中では、こうしたことは数多く経験することであつて、すべての聞いて自分の身を置くということが不可能な位ちょっと考えて

みればすぐわかるというものです。自分が、こういった状態にあっても闘いは多くの仲間たちによつて進められています。なんとか、闘いの展開というものがわかつてきたような気がします（？）。

さて、自分は今、統一公判を手にするまで、ここで闘い抜く決意を固めています。

地裁の方針はなんとしても粉々に碎いてしまわねば。

逮捕されてから既に何日になるのか計算してみないとわからぬ位の日数がたちました。数えてみると、ちょうど百日になります。ついに三桁になりましたが。

本富士から荏原へ、警察のとり調べ、僕だけ調べがなく、何日も放つて置かれたこと。二月九日付で起訴、何日たつても移送にならずライラしました。起訴状が来ない。やつと移送。二月十九日東拘へ。やつと本が読めるし、手紙もかける。機会あるごとに書きました。三月十三日、理由開示請求。三月二十四日開示裁判。あっけない幕切れ。四月九日拘留取消請求。却下。百日の間に何回か太学の教対が面会に来ました。親父も遠くからやって來た。

今までに教対は忙しく、資金カンパ、情宣・接見、差入れなど、あるいは父兄会の結成、弁護団は地裁との交渉、集会の設定などとやって來た。

五月になると、おそらく分離公判が強行されることでしょう。それに対しても、出廷拒否などで斗うことでしょう。獄中でこの間何をやつて來たのだろうか、と考えことがあります。

確かにこうした長期拘留に対しても頑張っていること自体斗いには遠いありませんが、何か非常に受身的で、淵でやっとこらえているようなものではなかったのか。押し返そうと踏んばることをしなかったのかと、今になって思っています。統一公判の要求の闘いにはやはり、「被告」とされた我々が斗い抜かねばならない。教対を通して、彼らの支柱たるブルジョア法を逆手にとつて斗いを進めてきたが、今後も進めていかねばならないと思います。こうした斗いと同じに獄中でどういったことをやって来たのか、じつと手を挙げて結果を待っていたといつていいのでは?それもおよそ見当がつく結果を。先日、「獄中書簡」が入りましたが、四人の人の中で一番短い文の中で「ハンストも辞すべきでない」ということを弁護士に伝えた人がいましたが、つくづく共感する点があります。我々が過去を振り返ってみると、こうした斗いが全く欠けていたといつていいと思います。四、三方針が出てから斗うという非常に不利な地点で、我々は立たされています。しかし、末だ、分離公判が強行されないうちに斗いを始めることが必要なのではないかと思います。拘置所にいる仲間たちは、充分その斗いを斗い抜けることでしょう。もちろん、それは、外の状況と合させて決定し、斗ついくことが必要でしょう。ハンストということは僕たちにとってあるいみでは消耗な斗いです。だって、自分で自分を弱らせていくわけで運が悪いと致命的です。でも、この東大裁判に課せられたものはまさに重大だと思います。

一片の刑事事件などにさせてはならない。この分離公判が行な

われるとすると、トウダイの「ト」の字も明らかにされないばかりか、全く消し去られてしまうことでしょう。

今日の斗いでも多くの者が傷つき、逮捕され起訴されることでしょうが、今後の裁判は今回にならって、分離が当たりますとして強行されることは必至です。

中ではすでに指示があれば斗い抜く決意をみんな固めているし、イライラしていることでしょう。外の状況と合わせて、検討してほしいと思います。至急に。

地裁との交渉の時点での斗いを始めるべきであった。拘置所、刑務所にいる全ての学友がこの斗いを展開、それも一齊にするなどいうことになるのだろうか。外では大衆的斗いを展開することが不可欠である。

非常に雑な展開でしたが、今日はこれで!

四月九日東拘より

今井 遼

東大斗争が、医学部における研修協約斗争として始まり、不當処分白紙撤回斗争を通じ、六月十七日の機動隊導入を契機に全学化したことは周知の事実である。そして、このような局面の展開が大学当局(当初は医学部当局)の「話し会い拒否」と力による弾圧に対し、相次ぐ実力斗争による反撃というかたちで行なわれて來ることも周知の事実である。

三月十二日処分が発表されて以降の医学部全学斗争委員会の

評議会団交、卒業式・入学式阻止、学生委団交、そして時計台第一次占拠といった一連の斗争がどのように位置づけて斗われたかを最初に明らかにしておく。

云うまでもなく、それは十七名の大量不当処分の性格・本質そのものにかかる。医全学斗が求めた研修協約そのものは極めて些細な改良的要求に他ならなかつたが、当時、政府厚生省との意志一致の下に青年医師收奪のための登録医法成立に全力をあげていた医当局にとっては、この法案に反する協約を結ぶこと、自らの支配体制を覆すような（非人局の）青医連を公認することは絶対にできないことであった。それ故、一切の話し合いに応じないだけでなく、春見事件を逆用して主だった活動家のページによって一気に運動の撃滅をはかったのである。つまり、医学生・青年医師と医教授会当局（そして政府厚生省）とは、全く相反する利害関係にあり、さらに、医療政策等をめぐって完全に対立する立場に立っていたのである。したがって権力を一手に握る医教授会はその権力をフルに発揮し、一方医全学闘は、無権利の者にとっての唯一の武器である大衆的な團結と実力により、当局を学生・青年医師の大衆の前に引き出そうとしたのである。

それ故、医全学闘が採った実力斗争方針はまず第一に、医当局そして東大全学当局が、学内における権力として機能できる所以である大学の「正常な機能」である教育・研究・診療を完全に停止させるということである。その際、教授会メンバ一でない、つまり学内権力機構員でない研究者たる者たちや

はり、彼等が日常的な研究に埋没し、大学の「正常な機能」を維持している以上、我々としては、実力斗争の対象とせざるを得なかつた。このことは、彼らが主観的には権力者＝教授会に加担していないと考えていたにしても、実は客観的・現実的に権力を支えているのだと、うことを悟らせ、また、そのことを通じて、日常的に行なつてゐる「学問研究」なるものの階級性を明らかにする上で、大きな意義を持つた。

もちろん、このような斗争の推進は斗争主体自身が、帝国主義大学で商品として生産されながらも、客観的には人民に敵対する支配階級の手先となるという自らの立場を拒否し、否定していく、そのような主体変革を抜きにしてはあり得なかつた。このような主体変革は、一つには、客観的・階級的な自己のそして大学の位置づけを通じて行なわれ、一つには、大学と学問にまつわる数々の「神話」の破壊を通じて行なわれた。

現在の大学がその創立以来の歴史を通じて、常に支配階級の支配を貫徹するための道具として機能して来たことは云うまでもない。とりわけ、東大は帝国大学として創設された時以来、高級官僚、高級技術者、体制イデオロギーを統々と生み出し、一方において、官学・産学・軍学協同の要に位置して、日本資本主義の帝国主義的發展のためにその「学問研究」の成果を注ぎ込んだのである。権力と無関係の、あるいは、反権力的な学問研究があつたと云う人がいたかも知れないが、よくよく考えて見れば、そのような「学問研究」は総体として権力支配の道具であつた東大における學問研究の補完物にすぎなかつたこと、

それ故、階級支配の手段としての学問研究の権力からの独自性といったイデオロギー的紛糾を支えたものに他ならないことが明らかになる。東大生や東大出身者で例えれば、新人会などのように人民の斗争の前進に力をつくした者も多いと主張する人がいるかも知れない。しかし、そのことをもって東大における学問研究や教育が一貫において進歩性を持つていたということの証拠になるであろうか？そのような学問研究や教育は大学において初めて可能だったのでしょうか？階級支配のために設定された大学において、たゞにして反権力的、反体制的学問研究や教育が行なわれることがあるのは事実である。しかし、それはほとんどの場合階級支配のための雑誌物にすぎず、それが現実に被支配階級にとって意味を持ち得たのは、眞に斗う部分がそれらをつかんだ時にすぎなかつたのである。階級斗争が斗われるとき、革命的あるいは進歩的な理論があるとすれば、それは決して、机上の研究から生まれたものではないのである。それらは階級斗争が、自らの中から生み出すものであり、学者あるいはインテリゲンジヤとの関係でいえば、彼等を階級斗争の真直中に引き込んで始めて彼らの理論的活動を階級的なものと成し得るのである。

現在、全ての学問研究はそれは誰の眼にも明らかに権力と資本に奉仕しているものののみならず、「進歩的」「民主的」と云われて来たものを含め、全てが、解体を迫られており、全く新しい立場からの再編を要請されている。すなわち、学問研究がもし、人類の進歩、歴史の発展と共に、そのためあらんとする

るならば、まず第一に、人類の進歩、歴史の発展を推進する者は、資本主義搾取機構の上にあぐらをかく一握りの支配階級ではなく、労働者階級を先頭とする圧倒的多数の人民であることを見抜くことである。そしてそのような把握をするならば、新しい立場とは、労働者階級を先頭とする人民の斗争が前進するのに役立ち、あるいは、その斗争の前進の中で始めて進歩するものでなければならないという立場に他ならないことを明らかである。「科学」と名づけられるものが、それ自身の中に一つ展開・発展の論理を持つてゐるかもしれない。しかし、それはあくまでも、階級社会から独立したものでおわり得ず、権力との関係においては、それに奉仕するか敵対するかの二者択一しかあり得ず、生き生きとした階級斗争の展開からエネルギーを与えられずには展開・発展の契機をすらつかむことはできないのである。このことは、社会科学にのみあてはまるものではなく、自然科学においても同様にあてはまる。人間の自然に対する斗いは生産斗争に他ならないが、これは階級斗争と表裏一体の関係にある。

「どのような社会体制においても、どのような思想に基づいても、自然科学においては、研究結果は同じだ」と云う人があるかも知れない。そして、個々の分野の結果について云々べきかにそうかも知れない。しかし、そこで重要なのは、その個々の結果に到る過程であり、それがどのような全像の中で進められるかという問題である。ある具体的な時間の流れの中で、ある人々が、ある一定の手段や資料を使って何のために、どの

ような方法で自然にアプローチするかということは、明らかに社会的な人間の苦み・階級斗争と生産斗争によって規定されねばならないし、全体像は階級的歴史観・自然観以外の何物でもない。

新たに立場に立つての学問研究の育成方向は新たな社会をつくり上げる主人公としての労働者階級の立場に立つこと他ならないが、労働者階級の立場に立つということは、彼等の歴史的事業である階級斗争が、階級の廃絶をめざす斗いである以上、明らかに、精神労働と肉体労働という分業を止揚する方向でなければならない。とするならば、この方向は中國において展開されているプロレタリア文化大革命の指向する方向にそって行なわねばならないことも明らかであろう。すなわち、もし新たな立場に立つた学問研究の再編があるとすれば、それは、精神労働を専らにする知識人の手によつてなされるのではなく、つまり、何か新しい「科学論」とか「技術論」とかを発見することの中からなされるのではなく、戦斗的労働者階級の斗争を発展させるという観点からのみ、運動論・階級斗争論として、行なわれるであろう。

このことは又、学問研究と権力、学園斗争と権力の問題をも明らかにする。

すなわち、かゝる観点からのプロレタリア的学問研究の確立は、労働者階級による権力の樹立を抜きにしては語り得ないものであり、したがって六八・六九学園斗争は自らの中にブルジョワ的学問を解体しプロレタリア的学問を確立すると

いう独自の指向性を有しつつ、労働者階級の斗争の前進という普遍的方向性を自らの斗争の発展の指向性としてもつてゐる。

階級斗争の前進と相対的に独自に何か「民主的」「進歩的」学問研究をつくり上げる運動などはない。と同時に、体制の変革なしにはプロレタリア的学問研究はあり得ないとしながら、逆に体制さえ變革されれば、学問研究はただちにプロレタリアートのものとなるという考えも全く間違つてゐる。ソ連に見られるように一たびプロレタリアートの手に権力が握られながら、学問研究そして教育はその本質においてプロレタリアートのもとのとならなかつた。それらは相も変わらず一握りの人々によつて専有され、新しい知識階級 官僚層を生み出したのである。

我々の半年は七項目要求の斗争に始まり、今、東京帝国主義大学解体の斗争へ発展している。そして、全教育秩序の解体へ、帝國主義秩序の解体へとつき進もうとしている。かゝる発展の中で、我々の斗争は永続性を獲得し、個別斗争と全人民的斗争という区別をはつきり止揚する方向を切り開いた。かゝる斗争は、したがつて、権力者・当局者に何かを要求する斗争ではないし、また、権力者・当局者の政策を粉砕するだけの斗争でもない。明らかに、労働者・人民の権力樹立を目指す永続的・連續的斗争である。

我々が「帝國主義大学解体」「重権力を創出せよ!」と言るのは、まさにこのことを指している。不斷の斗争・不断の支配秩序蚕食(解体)・不断の人民支配圈の拡大がその内容である。我々は我々の日々の生活の場に戦場を設定したのである。我

々の日々の生活の場を支配階級に制圧されるのか、我々自身が支配するのかといふ。遅くとも中断することもできない遊撃戦が始まったのである。このような斗争は苦しい。とりわけ軍事的には非常に困難である。しかし、このような斗争が全都・全国に多数の拠点を定め、展開されるならば、そして、当然のことながらそれが統一した指導の下に斗われるならば、支配階級の暴力装置は全く無効となり崩壊する。これらのこと

は、中国人民が、ベトナム人民が、そして、多くの戦斗の人が実証してくれた斗いの路線である。これこそが人民戦争解放戦線路線であり、日本においては、一〇・八羽田斗争以降全学連を先頭に戦斗的労働者・農民・市民が切開いて来た路線である。

我々は、日本における階級支配の重要な拠点となっていた東大の中から、この輝かしい全人民的斗争の高地にまで登りつめたことを誇りとする。我々は、今、東大斗争が日大斗争等と連帶する中で、一〇・八羽田斗争以後の人民戦争－解放戦線路線の展開へ、身をもって、自らの力で到達したことを誇りとする。我々は、今や、反人民的な九〇年の犯罪的歴史をはっきり打ち払って、人民の斗いの過中にとび込んで行かねばならないし、人民が必らずや我々を迎えてくれることを確信する。

現在、非常に狂暴化した弾圧の下で多くの学友諸君が斗っているのを厚い壁を隔てて聞くことしかできないのは何よりも辛い。我々にできることと云えば、長期不当拘留による弾圧に屈さずがんばることと、外の同志諸君に迷惑をかけないこと位な

のだろうか？ 我々、自由を奪われている者は、日々の拘留生活の中で来るべき日のために理論と知識を貯め込んでいるだけはないのだ。日々身体を耐えていること、そして、何よりも、支配階級に対して、怒りと憎しみの炎をますます高く燃え立たせているのだと、此事を彼等は知るであろう。

（おわり）

四月十六日東拘より

水上 26号 (つづき)

昨年暮れから今春にかけての反革命の急速な進行のなかで、今まで自分の獲得したささやかな学問知識、人間らしい感受性等々もこの「非人間化された社会」の「資本の鉄の法則」の貫徹を許す。にとどまるほどのものならば、確實に自己の発狂等々の「破滅」にもたらす以外の何ものでもないことを最終的に確認。もはやこの市民社会のなかで、執着して守るべき何ものを持たない。そしていまや自分ひとりでは撃退できず、もはや誤魔化しえない絶対的に有無を言わせぬ困窮 (No-t) 必然性 (Notwendigkeit) の実践的表現ーに追い込まれ、この非人間化に直接反逆せざるを得ないよう驅り立てられた。

教育斗争——「学問」という疎外態を人間的・社会的現存 (帰還せん) とすることを通して、一切の疎外の積極的止場。し

かし「國家」「政治」「法律」「道徳」「科学」「學問」「教育」「藝術」等々の疎外感を人間的社會現存へ「帰還」させなければならないということはわかるとしても、最後にして最強の難関は「家族」——この「有機體」の陰湿な支配（への隸屬）をいかにして粉碎するか、この「自然成長性」の「廢棄」をいかにして克ちとるか——「學生」と「家族」との關係は、

その「學生」が（あるいはその個人が）「ある個別家族の成員」という狹少な規定性のなかにとじこめられるという、理論的に同じ關係にたつとしても、その現実的意味は違う。中產階級の子弟にとっては、あるいはインテリの子弟にとっては、家族の經濟力から言って、あるいは親の學歴から言って高等教育を受けすることはむしろ当然である。そして親が支配階級あるいはそのイデオローグであるときには、その子弟にとってはその生活環境（現実總体を觀念的・理論的に把握し、臨むことが通常）から言つても、実現的共同体の「理論的現存」であることは自然（容易）である。それに反し、小市民あるいはそれ以下の階級の親たちが、子をみずからソーシャル・ランクより押し上げようと高等教育を受けさせる場合には、その子にとっては、彼らの家族の生活は、ユダヤ的な現実の汚濁のなかにすっかりおぼれていて、故に小市民的反逆はありうるが被支配階級の実踐道德（生活倫理、生活規範）の世界を越えて、實在する現實總体を普遍的に認識し、あまつさえそれに敵対するということは、單に心理的不安緊張の原因となるのみならず、自己の學生存在の基盤そのものを、壊り崩す實在的意味をもつ。（貧しき

い両親が物質的貧困に耐え、人格的矜持を犠牲にして學費を出している。）つまり彼は、両親たちの享樂すべかりし（あるいは将来において享樂すべき）物質的豊饒であり、人格的豊かさである。両親たちは彼という学生存在そのものの一面に付着している物質的みじめさを示し、又自らの人格的欠損、恥部となる。

現在の學生存在は、両親たちにとって、約束された物質的豊かさであり、それが幻想であるとして廢棄されたとしても、あるいは最低限、辱しめられた人格的誇りであり、もしくは誇りの将来における回復（ブルジョア的共同體内部における）である。そしてそれを若干なりとも引き受けることによってはじめて彼は、「大學」へ來「學生」という身分を得、学生としての生活を保障される。したがって教育闘争において、「學問」「教育」「法律」「國家」等々を極限的に問いつめ追いつめて行くことによって、最終的には次の選択を迫られる。即ち、今なお、そして、こちらの出方次第では「将来」的にも、あらゆる意味での「隸屬」と「困窮」の「どん底」にある「家族」に屈服することによって、そのことをもって、この「日本帝国」に屈するか、あるいは自己の人間的欲求が「個別家族」の狹少な規定性を突き抜けることをもって「學問」「教育」「道徳」「法律」「國家」等々の疎外の總体を「人間的な、すなわち社會的な現存」へ帰還するのか、手ごたえのある「現実」の闘争がある。

たいする排他的な関係、強制された共同生活、子供の存在や今日の都市の構造や資本の形成などによつてあたえられていた諸関係は、いろいろのさまたげをうけながらも存続した。なぜなら家族の存在は、市民社会の意志から独立な生産様式とのつながりによつて必要なものとされているからである。

(ハイツイデオロギー、岩波版 一六一ページ)

今日、学生運動をそのエネルギーな推進力とする日本階級斗争は、単なる結果としての政治闘争に決起しうるのか否かという皮相な選択ではなく、自らが日々帝国を塗り固めかねない市民社会のその最小の細胞そのものにおいて「資本」と誤別するのか否かという選択を迫っている。この家族への屈服は論理的にはその頂点における国家への屈服につながるものである。一方において旧来のままの「個別家族」の枠の中にとじこめられたまでの「他方での断固たる教育・政治闘争」などといふものは、論理的矛盾でなければ、根なし草の街頭の狂燥に過ぎないのではないか。いわば階級支配のどろ沼の上澄みをかきまわしているにすぎないのではないか。もちろん、いかなる疎外においてもブルジョアジーは、「疎外」のうちに「快適」と「安定」を感じ、疎外のうちに「人間的存在」の「外観」を保ち、この「疎外」を自分自身の「力」とし、「武器」とするわけだけど、いま問題になつてゐるのは、このブルジョアジーそれが自体の打倒である。物質的にも精神的にも（老いて）貧しい「家族」との認別ということは、単に疎遠になり、—— ちょうど小鳥が巣だらし、けだものが乳ばなれするように 彼らか

ら遠ざかるだけで充分ではない。「家族」を「家族」とし、俗世のものとして未練がましく捨て去り、自ら聖列に加わるのでは、俗世のものに何ら影響を及ぼさない。（これは止揚ではない。積極的に新しい現実的な人間関係を作り出すこと）自ら聖列するのは俗世を俗世としてむしろ肯定し、それを更に前程とするからである。我々の立場は次の如くである。他ならぬ父母（「じつは非人間的な社会とはすかしげもなく野合する淫猥な」存在。）—— 貧しく賤しめられ、辱かしめられている彼ら、あるいは夫に別れて寡婦（前述の（ ）内と同じ）の細腕でわが子を養育する母—— 寡默で善良で禁欲的でつましい庶民の彼ら、この資本制社会という非人間化された社会＝分業と私有財産の秩序のもとにおける、うなだれて頭を下げる黙々たる畜類、彼らこそ、帝国の臣民、「期待される人間像」ではないのか。（＝奴隸の忍耐）人間の真実の社会性、ゆたかな共同性を政治的国家の抽象的公民という虚妄の普遍性のなかに奪われ、そして現実の経験的生活のなかでは互いに他を敵とし、手段として利用するこの社会の中で、自らを自立した個人として、直接に他の人間との結合を求める方向に向かわないと、彼らの寡默さと、自らの隸属をありのままに認識するのではなく、我が子という神の中に救いを求める彼らの誤れる貪欲さ、（自分の外の対象の中に）ことと、現在ではなく従来の安定にという二重の意味での二重構造（宗教構造）これを否人間的なものとして否定し、「意識と現実」という両側面において彼らの立場をとること。こういう自己の譲渡――

他の人格へのもたれかかりと、（現実ではない）将来の妄想へのもたれかかり。この二重の宗教構造が彼らの「現在的」な実在的隸属と困窮を苦痛として感受させることを鈍らせ、つまり反逆からそらせ、このようなものとして「帝国」は、日々空手形を発することによって先へ先へと延命する。このようにして「帝国」は臣民のそれぞれに「分」に応じた「希望」を持たせることによって、不斷にはらむ危機としての「崩壊」を免れ、国内のすみずみまでを階層づけ、秩序づけることによって、その非人間的な「支配」の外観的な「強固」さを日々誇示している。

彼らの神・生命なき偶像たることを拒否し、他ならぬこの「みじめな」父母を、痛苦とともに、だが断固として「足駄」にすることによって、「みじめな」のいっさいを温存することによって、存続し、それ自体支配のみじめさに他ならぬこの支配体制」を互換せしめること。一点のあいまいさも許さぬ、まさに「血・みどろ」の階級闘争がそこにある。そして「こういう支配体制のわくにとじこめられている、すべての社会階級・相互の重苦しい圧迫や、全般的な怠情の憂うつや、かんちがいして自分を肯定しているような偏狭さ（何と多いことか！俺は俺だとか、俺は文人だとか！）」こうしたものを描写し、糾撃し、粉碎すること、これこそが課題なのである。「問題は相手をやつつけることである。」問題はかれらに「片時も自己欺瞞とあきらめをゆるさないことである。かれらに圧迫を自覚させることによって実際の圧迫を從来以上に感じさせ、屈辱をはつきりさせることによって従来以上に屈辱を感じさせなければならない。

社会の階層ごとにそれが社会の恥部であることを描写しなければならず、これらの沈滯して石のようになった諸関係に、それらに等有のメロディをうたってきかせることによって、むりにも踊りをおどらせねばならない！国民に勇気をおこせるために、自分でも驚くほどの力があることを教えねばならない。それによって……國民のやみがたい欲求がみたされる。しかも國民の欲求は、それ自身それが満足されるための究極の根拠である。」

さよう、まさに「欲求」が出発点である。（旧友の某の如く「俺は俺だ」と世をすねたつもりで晦し、その実「社会」をふたたび抽象物として個人に対立させて固定すというアクロバティクな「非科学」の上に居なおり、そして唯一そこに依拠して「学問」——現在「学問」はそれ以上のものではないをしようなどというあやまれる態度、自己の生命の発現にとって——（人間にとて最大の富である））他の人間を必要とする人間には不可能で、他の人間を必要としないほどのひからびた感性、みすぼらしい欲求の前にのみ可能であるようないかがわしい「学問」は大にでもくわれるだろう！この偏狭な自己肯定の上に成立するものは学問でも何でもないのだということを断固として主張しなければならない。あるいは今回カンバを寄せてくれた旧友たち、「疎外された労働」にあき足らず、しかし自己の演技者的二重化により晦したり、あるいはマジヤンに打ち込んだり、上役に八ツ当りしたりして、あるいは

マイホームという小っぽけな「私有財産」のうちににげこんで

「悩みにみちた妄想」を享樂し、奴隸の慰安に甘んじたりして、盲目的に欲求不満のエネルギーを浪費して、彼らの苦しみは自己から他の個人との眞実の連帯をすっかり奪い去ってしまう資本の社会的権力のもとへの隸属に基礎をもつものであるということを見ず、そのよって来たる社会的基礎そのものの攻撃をしないが故に、主観的にはいかに世をすねていても見えて現実的には、日々帝国の必須な歴車としてくりこまれている。そしてそれ以上のものではないのではないか。まさに「國家は個人生活の対立のうちにのみ存在している。」彼らが僕によせるカンペは彼らが相変らずそのようなものとしてとどまるならば一つの論理的矛盾ということにもなるであろう。反戰青年委員会……。

とにかく、小学生までのワラウべきワイ小な所有者感覺（何がしかの学問・知識の）にがんじがらめになっていた立場をふりすてそれにつきまとっていた一切のアカをぬき捨ててきた。

「共産主義的意識の大量的な產出のためにも人間の大・量的な変化が必要であり、そしてこれはただ実戦的な運動すなわち革命においてのみおこりうるのである。だから革命が必要であるのは、たんに支配階級が他のどんな方法によつてもうちたおされえないからである。さらにうちたおす階級が、ただ革命においてのみ、いっさいのふるい汚物をはらいのけて社会のあたらしい樹立の力をあたえられるようになりうるからでもある。」

（ドイデ・一〇七ページ）

小生、「老いたる父母」等々に関する感傷などは安田講堂の硝煙の中に投げ捨て、放水の中に流して來た。機動隊員のテロルでどんな怪我をするやも知れぬ対決の中で、「身体髮膚、云々」

（これは個別家族を維持する必要から出た。極めて実在的な（物質的・経済的な）な意味をもつてゐる）などといふ生

活倫理で支えられる世界に死を宣告してわかれてきた。種々の夢もそのような訣別の最終的な確認にすぎないのではないか。「

「家族」から始まって「國家」にいたるあらゆる「見せかけの共同体」に鋭くさびを打ち込むことによって、ブルジョア支配を打倒すること。いまや、自己の生命の発現にとって、他の人間を必須のものとして、即ちプロレタリアート解放を必須の欲求として感じてゐる諸個人、そのようなものとしてプロレタリアートの階級闘争の先頭にたつて、全大衆をひきずつて（ちょっと問題ある表現一階級形成をみていいわけではないよ）いこうとしている部隊の一員たる、他ならぬ「ブルジョア階級の子」たる僕にとって「特定の」「母」は必要ではない。制約をうけた、一面的な旧い母は死んで、「社会の母」としての新たな全面的な再生を遂げなければならない。（次号へつづく）

◇ ◇ 編 集 後 記 ◇ ◇

ひとつ、『獄中』も『婆娑』も斗争の意思に何ら関わりないと
うこと、基本的に。

ふたつ、この書簡集は、『偏向』すべきか否か？ともあれ被告
団の結束に力のあらんことを！

（橘 朗）

「東大斗争は、愛と友情の問題を包摶しえないかぎり沾死の運命
にある。」と言ったひとがある。自らが闘うことの正当化に明け暮
れていれば、決して生まれてこなかつたこの提言。

脚う「我」にとって「他者」とは何か。「我が闘う」論理と「汝
が闘う」論理の間に、何の橋をかけ得るのか。

もつと豊かな言葉を私は欲しい。「個」の深みの中から、共に闘
う「他者」にむかってほとばしり出た感情の奔流。

（合理）や（論理）に弔鐘を！

（火夜里子）

△ お 知 ら せ △

りきれない）にニキビがひとつ赤々とふくらんでいるのを、加
藤君は「カフコ悪いヤツ」とむりやりつぶさんとしている。
ニキビひとつを気にする加藤君の気持は分らぬでないが、こ
のニキビは現在の帝大の『偽装された、正常化』の内実を物
語つており、加藤君のブタ面が実際に身体中ニキビだらけで
あり、腐り始めていること、その臭氣ふんぶんたること／＼周
知の事実だ。

△ ブタ面もニキビひとつをくやむなり△

（真 岬）

「獄中書簡集」創刊号（第五号までの中間総括・今後の
編集方針等々の拡大討論会・合評会の如きもの）を行ない
たいと思います。多くの諸君が参加されることを希望しま
す。

△ 日 時△ 五月二十一日 五時半より

△ ところ△ 「ルオー」（本郷三丁目一赤門の間の喫
茶店二階）

☆ 東京帝国大学の大通り、正門から銀杏の谷間を通つて安田講堂
前に至る道は、人間にたとえてみればそれは顔である。その顔に
銀杏の新緑と好対照に中文の赤旗が、小さいながら鮮やかに映る。
肥ったブタ面（それも本人は美男子だと思つてゐるのだからや

第一版 五月十一日 印刷発行
発行者 「獄中書簡」発刊委員会
委員長代行 加藤二郎
△ 連絡先△ 文京区向丘一の十二の七
東大追分寮内 811-3568
真崎猛哲